カタールのエージェント

1976 年にカタールの石油省からエチレン装置のユーティリティー及びオフサイト設備を受注した話は既に書き（独仏国境地帯)、また中近東の仕事でのエージェントの役割についても簡単に述べた。（いじめー１）
カタールの仕事が正式に受注が決まり、そのお祝いに我が社のエージェントになった Al-Fardan Jewelry(アルファルダン宝石商)という財閥でカタールの豪族の家に我が社の 4 人と商社の 1 人を加えて 5 人が招待された。アルファルダンが用意した特別仕立てのベンツで砂漠の中をしばらく行くとこんもりした林が見え、刑務所かと見まごうばかりの高い塀をめぐらせた大きな館に到着した。周囲は不毛な砂漠なのにその館の敷地内には周囲が 50 ㎝もある太い樹木が青々と茂って林をなし、別世界の様相を呈していた。この場所は元々砂漠の中のオアシスで、裕福な豪族はここに定着しているが、ベトウィンのように砂漠の中を放浪している者たちもいる。
白亜の館の玄関をくぐると足首が隠れそうな毛足の長い絨毯を敷き詰めた長い廊下があり、廊下の壁の引っ込んだところに金属製の大きな水瓶が飾られている。そこに何度か来たことのある商社マンが言うには、純金製の水がめで重さは 100ｋｇを下らないだろうとのこと。そんな水瓶やラクダの飾りが全部純金製だと聞いて、私のような貧乏人はラクダの耳を引きちぎって持ち帰りたい衝動に駆られた。100 畳はあろうと思われる大広間に入ると、既に 30 人ほどの現地人(同族の長老達)が周りの豪華な椅子に座っており、我々は「Salam Aleikom(サラマレイコム＝平和が貴方にあるように)」と挨拶し、握手をすると、今度はその相手が「Aleikom Salam（アレイコムサラム＝貴方に平和があるように)」と我々の言葉をひっくり返しにして挨拶を返してくれる。お互いに言葉が通じないから、身振り手振りで立派な屋敷だと言うことを言おうとするのだが、相手に通じているかどうかは分からない。アラブ人だって我々と同じようにジャパニーズスマイルを顔に浮かべていた。挨拶が済むと、部屋の中にインド人のボーイがウィスキーの水割りの入った」コップとオレンジジュースのコップのどちらが欲しいかを聞いて我々と現地人に配る。アラブで酒が禁じられているのは公衆の面前だけであり家の中では現地人だって平気で酒を飲んでいる。大広間の前面には畳 6 畳くらいもある大きなスピーカーがあり、そこからアラブで良く聞くコーランのお祈りに似たコブシの効いたやかましい音楽が流れているのだが、商社マンの説明によるとそのスピーカーは特注品で日立製だった。壁際の飾りには直径が 50 ㎝もあるアンモナイトの化石や、贅を凝らしたアラブの刀、アラビアンガルフで(アラブ人はペルシャ湾とは決して言わず、ア

ラビアンガルフまたはガルフベイと呼んでいる)採れた青みがかった天然の真珠が豪華なガラスのケースに飾られていた。
一族の長のアルファルダン氏から英語とアラビア語の短いスピーチがあり、我が社の重役がお礼の言葉を述べて、いよいよディナーの始まりである。様々な前菜の中で私が気に入っているのは、大豆を茹でて挽いてペースト状になったものにオリーブ油を入れて練ったものをアラブ式のパンに塗って食べるのだがこれが美味しい。アラブのサラダはレモンの酸味が効いた細かく刻んだ青菜だが、独特の香りがしてこれも美味。ただしいくら美味しいからと言ってこれを食べすぎるとメインディッシュが入らなくなるから用心した。しばらくするとメインディッシュを告げる銅鑼の音と共に黄色いサフランライスの上に羊の丸焼きを乗せた畳 1 畳分もあるかと思われる大きな銀の皿が現れた。主人であるアルファルダンが我々の皿にナイフとフォークでサーロインに相当するクリスピーな皮のついた柔らかな肉を取り分けてくれた後、現地の長老たちには手掴みで (これがアラブの慣わしだそうだ) 肉をちぎって皿の上に取り分けていく。長老の中の重鎮には目玉を、その次の位の人には雄の羊だけにある別の玉を分け与えるのだと商社マンは教えてくれた。別の玉がどんな味がするか興味があったが、まさか招待された身で要求するわけにもいかず我慢した。サフランライスはボロボロとほぐれやすく食べづらいが、掌でぎゅっと握ってから親指の爪の部分で押し上げるように口に放り込むのがアラブのお行儀だと教わった。因みにアラブでは左手を使って食事をすることはご法度である。何故なら左手は不浄な手、実際「ご不浄」で必要個所を洗う手だからである。羊の肉は香ばしく独特の香料を使ってあり、もう一切れ欲しいと思って振り向いたら、もう畳 1 畳の銀の皿は消えていた。それと入れ替わりに今度は何 10 数種類ものデザートが所狭しと並べられ、インド人のボーイがトルココーヒーを配ってくれた。一度に皿に載せられる品数は多くないのでリターンマッチをしようとしたが、今までデザートが乗っていたテーブルを見たらもうそれらは片づけられていて、棗（なつめ）などのドライフルーツと他の果物が並べられていた。
後で商社マンから聞いたのだが、このようなパーティーがあると、先ずお客さんに食事が提供され、残り物を次の部屋で待機している女子供に渡さなくてはならないから、主客は料理を食べつくしてはいけないし、提供側も十分な量を作るのだそうだ。トルココーヒーだけはお代わりを注いでくれたが、その間中、現地の長老たちは盛んにゲップを連発し、料理が美味しかったと言う意思表示をしていた。これもアラブのお行儀の一つだ。
料理は美味しかったが、リターンマッチを受け付けない方式に少々欲求不満が残った。しかし我々が住む世界とはまるで別世界のアラブの金持ちの生活を垣間見て、良い勉強になったことは認めるが、急に梅干しだけのお茶漬けが恋し

くなった。

いよいよ現場に乗り込み、キャンプや現場事務所のセットアップ(設立)が始まり、現地の官庁との折衝が必要になるとエージェントの出番である。アルファルダンは勿論我々の契約先の長であるが、そんな雲の上の人が毎回我々に付き合ってくれるのではなく、彼の番頭であるパレスチナ人のショーリーさんと云う方が我々の面倒を見てくれた。この方は教養のある方でアラブ世界だけでなく西洋や日本の文化にも精通しており、我々の常識から判断しがちなアラブの文化や風習との違いを丁寧に説明してくれた。
現場に乗り込んだ我々を前に一番初めに与えられた注意が何点かあった。その一つ目は「目には目、歯には歯」と言う復讐の習慣についてである。例えば車で人をはねた時、アラブ人ははねられた人と同じ状況を再現し、はねた人を制裁する、と言うよりしなくてはならないと言う不文律があるのだそうだ。だから、「もしカタールで事故を起こしたら相手がどうであれ、真っ直ぐエージェントのところに逃げてきなさい。私が匿い（かくまい）国外に脱出させ、被害者に対する保証は責任を持つから。」と言われた。次は、現地の女性に対する如何なる行為、声をかける、触る、じっと見つめる等々は決してしてはならない。これを犯した者は姦淫をしたとみなされ石打の刑に処せられる、と警告された。石打の刑とは、被告の首から下を土に埋め、頭だけ地上に出し、大衆が石を投げて殺す刑である、と教えられた。その時現場に来た我が社の若者（ばかもの）がそれを聞いて笑ったら、ショーリーさんはすごい剣幕で怒りだし、その馬鹿者に即時帰国するよう命じたが、我が社の現場の長がとりなしてその馬鹿者を暫く謹慎処分にした。
ショーリーさんはサウジアラビアで実際の起こった例を話してくれた。ある英国人が砂漠の奥地で道に倒れている現地の女性を見つけ自分の車に乗せて近くの街の病院まで搬送したら、現地の人達に掴まりその町の宗教警察に連れて行かれた。宗教警察はその英国人がアラブの女性に対して姦淫をしたと認め石打の刑を宣告した。そのことが現地の英国領事館から英国本土に迄知れ、英国女王からサウジの皇室に「彼は人道上、その女性を助けたのに、もし死刑にするなら英国はサウジと国交を断絶するし、英国内のアラブ人に対して報復処置を講ずる。」と抗議したため、その男性は釈放されたが、もう少し遅れていたら刑は執行されていたかも知れなかったと言う。
その当時（1976 年）のカタールはアラブ諸国の中でも進歩的な国であったにもかかわらず、このような公開処刑は日常的に存在していた。私も一度公開のむち打ち刑を見たことがあるがその残酷さに現実の世界にもまだこんな野蛮なことがあるとは信じられなかった。

ショーリーさんによれば、アラブ世界の中でも宗教を厳格に順守しているのはサウジアラビアで、イスラム教の聖地メッカに毎年参拝する数 100 万人の人達を狙って以前に強盗団や盗賊が跋扈したため、先々代のサウド王がこれをなくすために極刑を持って当たったのだそうだ。例えば盗みを行ったものは右手首を切り落とされ、2 回目は左手首、3 回目は右ひじを、と言うように見える形の刑を実行したという。
彼が最後に与えてくれた忠告は、日本の美徳はアラブでは必ずしも美徳ではなく、場合によっては誤解を招く恐れがあるから注意せよと言うものだった。例えば困った人を助けると言うのは「助けてくれ。」と頼まれた時だけにして自発的に助けることは誤解を招くからやめなさいと言われた。
私がアラブ人に感じた美点は、西欧人に比べて感謝の念を忘れない、つまり感情がウェットだと言うことである。2 度目のカタールのプロジェクト（1996－2000 年）でカタールに行ったとき、アルカイーダの報道で有名なアルジャジーラテレビで日本の「おしん」を放映していたらしい。一緒に仕事をしていたカタール人からその話をよく聞かされたし、彼らが日本人に対して「おしん」を通してある親近感を抱いていたらしいことも分かった。
カタールのエージェントの話が飛躍してしまったが、我々はともすると日本人の倫理観、宗教観、または儒教思想の影響などから、外国人も同じように考えるだろうと思いがちだが、これは非常に大きな間違いであることがある。
私がマレーシアのビンツルと言う町でＬＮＧのプロジェクトをしていたとき 1991－1995 年)、ＬＮＧタンクの工事を我々もよう知っている日本の業者が受注していた。タンク工事の開始に先立って現場事務所やキャンプの設営を始めるべくその会社の建設部長が現地に乗り込んできた。彼は単身で赴任してきて現地の業者や官庁との折衝のために現地人の運転手を雇い、彼に案内をさせて重宝がっていた。昼飯時になると彼と一緒に飯を食べ、夕飯時も彼をレストランに連れて行って一緒に食事をしていた。建設が段々本格的になってきて日本からその会社の建設部隊が到着すると、その部長は今まで一緒にいた運転手とは当然食事もしなくなったし、顔を見ても挨拶さえしなくなってしまった。建設部長にしてみれば、今まで可愛がって上げたのだから、それだけでも有り難いと思え、お前は我々の臨時雇いでしかないのだ、と思っていたのだろう。ところがその運転手にしてみれば、自分の方には何ら悪いところがないのに、あれほど重宝がって自分を使ってくれた部長に最近は無視されて気分が悪いと思うのは頷ける。
噺は変わるが、マザーテレサは「愛の反対語は憎悪ではなくて、無視である。」と言っているが、その運転手にしても部長に無視されて憎悪以上の悪感情を部長に抱いたのだろう。この運転はボルネオ奥地に住むイバン族と言う昔は首狩

り族だったため、自分の感情に従って、ある晩部長の住居に忍び込み蛮刀で部長を刺殺してしまった。
人によっては、「かけた恩を仇で返された」と思うかもしれないが、受ける側の人間は「恩」だとは思っていないで反対に利用できるときだけ利用しておいて、後は無視された（憎悪された）と感じていたのではないだろうか。

カタールの仕事の後、私はクウェート、ナイジェリア、アルゼンチン、イラン、マレーシア、カタール、オーストラリア、中国など海外を渡り歩いたが、先ず自分に言い聞かせたことは、自分の物差しで相手を測るな、と言うことであった。このことは取りも直さず相手の文化を知り、これを理解し、尊重せよと言うことであった。その始まりがカタールのエージェントの番頭のパレスチナ人のショーリーさんだったのは感慨深い。

現在日本の周りで起きている外交問題で、私は一般の日本人とは違った見方をしている部分があると思う。先ず相手の歴史的背景や文化から考えて、相手の立場に自分を置いてみた時に、彼らが考えるであろう事柄を想像してみることがある。韓国や中国に同情的な見方をしているわけでは決してないが、日本の外交戦術を考えるうえで、「もし私が外務大臣だったらこうしたい」と言う机上の空論は両手、両ポケットに一杯ある。

完